

帝王切開のネガティブ・インパクトの克服と新たな取り組み

企画者のことば

桑原慶充

近年、妊産婦の高齢化や、生殖補助医療による妊娠の増加に伴い、胎盤位置異常、癒着胎盤、妊娠高血圧症候群などのハイリスク妊娠を取り扱う機会が多くなっている。こうしたなかで、日本の帝王切開率は増加の一途をたどり、厚生労働省の調査では全分娩に占める割合は27.4%まで上昇している（2020年医療施設（静態・動態）調査・病院報告の概況）。

帝王切開術は母児の安全を担保する目的で広く実施されている医療技術であるが、複数のネガティブ・インパクトと関連する。帝王切開癒着症候群は続発性不妊症や子宮破裂のリスクとなり、帝王切開で頻度が高まる分娩後の子宮内異常血流やRPOC (retained products of conception) は危機的な後期分娩後異常出血の原因となる。肥厚性癒着やケロイドは生涯のQOLに影響し、緊急帝王切開による心理的なトラウマはメンタルヘルス不調の原因となる。前置胎盤・癒着胎盤の帝王切開には、大量出血のために子宮摘出を余儀なくされ、妊孕性を喪失する潜在的风险が存在する。様々な局面において帝王切開を選択せざるをえない現状において、こうした負の側面に目を向けることの重要性が高まっている。

そこで本特集では、帝王切開がもたらす様々なネガティブ・インパクトと、それを回避するための実践的なアプローチについて、エキスパートの先生方に解説していただいた。日常診療で行っている帝王切開術を見直し、プレコンセプションケアから生涯のQOLまで配慮した、さらに質の高い周産期診療の実践に向けてお役立ていただけると幸甚である。